

1 本研究の背景と目的

諸大学及び諸短期大学における保育学科への入学生について、かつては入学前に『バイエル・ピアノ教則本』を終え、入学してからのピアノ実技に困ることのないように準備をすることが一般的であった。しかし、近年では入学時にピアノ実技が未経験である学生が増加傾向にあることが顕著に表れている。そしてその流れに起因し、諸大学及び諸短期大学の保育学科では、学生がピアノ未経験者である可能性が高いことを前提としたカリキュラムの内容設定が前提となりつつある。本学のカリキュラムにおいても例に洩れず、数年前から単位取得における曲数の修得や授業の在り方などは毎年変遷を辿っていると言える。今後も入学時点でピアノ未経験者数が増加することが見込まれることから、指導者側においても指導法や内容といった全ての点において、より現状に即した内容が求められることを筆者は実感している。

このような背景から、本研究はピアノ初心者が少しでもこどものうたの弾き歌いを演奏し易くするツールの1つとして、こどものうたの伴奏型について着目し、より短時間で演奏することが可能となる演奏法の習得について考察を試みた。こどものうたにおいては多くの曲が右手で旋律を演奏し、左手で伴奏型を演奏するケースが多く見られることから、本研究においては左手における伴奏型を研究対象とした。学生自身が楽譜に書かれているピアノ伴奏が難しく、演奏が困難な場合においては代替可能な範囲の伴奏型を論理的に教授し、最終的には学生自身がその知識を基に実践可能な演奏方法を導き出し、弾き歌い演奏の技能向上に結び付けることを目的とする。

2 研究の内容と方法

本研究はピアノ初心者の学生を中心に考察を進めることから、前期数回分の授業は音を正しく読むことや、両手で演奏することを経験する必要があった。次段階は楽譜に記されている伴奏型の基本的な性質の理解を深めることなど、演奏に紐付く基礎的な知識を併用しながら教授を進めた。本研究の最終的な理解に至るまでには、調性や主要三和音の理解が必須となることから、本学学生は演奏することと知識を深めることを平行しながら培う必要があった。これらの内容を前提とした上で、楽譜に記されている左手の演奏難易度が高い場合は、代替可能なコードを

理解し、そのコードの結び付け方を習得することが、より早く演奏技術を習得することに至ることから、授業の度に順を追って教授を重ね、学生の理解を進めた。これらの過程は順を追った行程を1つも抜かさずに積み重ねることが最終的な理解に繋がる性質を持つことから、学生が最終的な理解を得るためには授業数および時間を費やしたことは否めないが、今後学生自身がその技術を活かし、どの作品においても応用出来る技術を習得し、弾き歌いを演奏し易くするには必要不可欠な内容と考え、本研究にて学生に対して行う最適な教授過程を考察及び研究した。本学の必修科目「音楽Ⅲ及びⅣ」の授業においては『こどものうた 200』（小林美実（編）、1975、チャイルド本社）が採択されていることから、本論の検証においても同テキストを考察対象とした。筆者が授業で教授した内容と、教授を受けた当該学生に対し行う対話を通して学生の観点との関連性を探り、相違が見られた場合はその修正を図りながら、教授する内容が指導者側の一方的な理解や所見ではなく、相互の視点を踏まえながら、より正確な教授方法を見出すことを試みた。

3 まとめ

本研究は、楽典の基礎的知識を用いながら最終的には楽譜に譜されている左手における音の内容に関して、代替可能なコードで演奏出来るところに結び付けることにある。その行程は、筆者が理論上においては最適と考えられる順を追いながら考察及び研究を進めるものの、最終的には学生自身の実技演奏に結び付けるため、その考察における検証が論理的であったとしても確たる実証がない限り、効果の範囲や考察内容を断定することは出来ない。しかし、筆者は確実な音楽理論を用いて学生の演奏における現状の把握及び演奏意識を確認しながら、正しい理解及び演奏における考察を重ねてきた。

その考察から、結果的には学生が弾き歌い演奏における左手伴奏を演奏し易くするツールの1つとして導き出すことができ、ピアノを弾くこと及び弾き歌い演奏を行うことが容易に実演させることが出来た。この試みによって培われた演奏技術は、本学を卒業し、保育現場に携わる際の演奏にも紐付けることを可能とし、有意義な結果が得られたと考える。